



川原 咲凜 (かわはら さくら) みなみ野君田小 6年生

作品名：転んでも、大丈夫

図 書：転んでも、大丈夫

「もしも、自分に足がなかったら…。」

あなたは足のない生活を考えたことはありますか。この世界には、足のない人が何万人もいます。もしも私に足がなかったら、味わったことのない不安で胸がいっぱいだと思います。だれにも足を見せたくない、もしかしたら「死んでしまいたい」とも思うかもしれません。この本は、足をうしない、つらい思いをしている人びとの義足を作る臼井二美男さんの義足作りの人生がえがかれています。「新しい人生を、前むきにふみだすきっかけづくりがしたい」ー！臼井さんが働いている鉄道弘済会義肢装具サポートセンターには、足をなくした人が義足を作りに大勢やって来ます。今では、オリンピック選手の義足をつくるほどの高い技術を持っている臼井さんですが昔、鉄道弘済会義肢装具サポートセンターに入ったころは、臼井さんも思いどおりにいかないことがたくさんあったそうです。患者さんから、「お前みたいな若どうに、おれの大事な義足は任せられない。」と言われ、先輩にかわってもらったことがあり、その時は、とてもくやしい思いをしたそうです。しかし、臼井さんは、くじけず、そのくやしさをバネに「若い」というだけで不安にさせることがないように、一生懸命働いたそうです。技術を身につけるだけでなく、年配の患者さんともいろいろな話をして、少しずつ信頼関係をきずいていったそうです。患者さんに信頼してもらえるように、たくさん努力をしたんだなと思います。くやしさをバネに一生懸命がんばる臼井さんは、すごい人だと思いました。

私は、この本を読んで、臼井さんの義足に対する考え「なにごともやってみなけりゃ、わからないという気持ちで、目の前のことにチャレンジする」という言葉がとても心にひびきました。なぜなら私は、一度もやったことの無い事でも、チャレンジする前に、「ああ、できない。」「無理。」と自分の中で決めつけて、目の前の事からにげてしまうのです。しかし、この本にかいてある、義足をはいている人達は、何にでもチャレンジしているのです。臼井さんに義足ランナー第一号として「どう？走ってみたい？」と声をかけられた柳下さんも、「やってみたい！」とすぐに答えていました。義足をはいている人は、自分のできる限りのいろいろなことにチャレンジしているの

に…、ふつうの体の私は、目の前のことからにげている、情けないと思いました。なので、なにごともしやってみなけりゃ、わからないという言葉に胸に目の前のことにチャレンジしてみようと思います！。

私は、この本を読んで義足のことを知り、一つ分かったことがあります。それは、義足をつくる仕事は、ただ義足をつくるだけでなく、その人の人生を前向きにでき、いろいろなことにチャレンジする勇気をくれるのです。臼井さんがつくった義足をはいている人も、みんな幸せな顔をしています。そして、できないと思っていたスポーツに挑戦し、パラリンピックに出ている人もいます。義足は人を幸せにする力があるのだと思いました。しょう来は、私も人を幸せにできる仕事に付きたいです。